會報

1965年6月 | 240 | 日本山岳会

これからの方向

松方三郎

日本山岳会は、何はともあれ、山を愛する同好の士のクラブだ。だから会員に対して、今年は何をしたらよいか、それを第一に考えなければなるまい。

ルームの整備、会報の発行、「山岳」の出版、大小の集会、それらのものは、何よりもまず、わが会員のための活動である。

ルームも、移ったが、われわれの考えていたようなところまではまだ出来上っていない。設備もさることながら、会員の集合拠点として考える以上は、はっきりした世話人もいなければならない。

まず会報を月刊に

会報を月刊にしたいという考え方は随分前からあったものだが、今年度は是非これを実行したいと考える。何としても、地方会員との結びつきは会報を通して行われるのだから、この問題は大変重要だ。会報の内容をよりよくすることももちろんだが、もっと短い間隔で会員と接触することを考えることは一層大切なことだと思う。

とにかく考えれば問題は数限りなくある。そのすべてをあの小さなルーム一つで何とかやりくりしようというのだから、なかなか難しいことであるが、今年は何とかしてこの方面での面目を一新したいと思う。

公的な義務

当然のことだが公的な存在としての日本山岳会の義務も考えなければならない。これは日本山岳会が日本の登山界を代表するとかいうことではなく、――そのためには日本山岳協会がある――現に日本山岳会の中にある人的資源や、会の長い歴史から自然にかかってくるものだ。いくら会員のためのクラブだといってみても、事と次第によっては公的機関として行動をとらねばならないことも多い。そして日本山岳会は、そうした責任は、やはり取る覚悟が必要だと思う。

いうまでもなく、日本山岳協会の構成要素としての日本山岳会の義務、責任は、この分野で一番大きなものであろうが、その意味で、大いに日本山岳会も力こぶを入れて行きたいと思う。

本来からいえば、そうした仕事に引出される個々の会員にとっては、これは確かに一つの負担であるのだが、その責任を負わされた以上は、立派にそれを果して欲しいし、又会としても十二分にそれを支持しなければなるまいと思う。二階に追い上げておいて、梯子を取外してしまうようなことは禁物。これまでそうした傾きが全然なかったとは、どうもいい切れないように思うので、こんなことも併せて述べるのである。

対外関係

対外的な仕事は、どうしても日本山岳会に集中してくる。今日までの会と外国の会とのつながりや、会員と外国の登山家とのつながりや、いろいろの関係からして、この傾向は今後も強くなることはあっても弱くなることはあるまいと思う。外国から来た人々のために便宜をはかったり、またその人達と日本側との間の橋渡しをしたりすることは実に多いのだが、この問題は必らずしも片貿易とは限らない。こちら側を向うに推し出すこともあろうし、そうした接触を通して大いに学び、便宜を与えられるものも少なくない。

協会への支持

山岳協会そのものは、まだ未熟なものを少なからず持っている。しかし、未熟だといって力を入れなければ、いつまでたっても未熟の状態を脱却することはできない。幸い年を重ねている間に協会そのものの地位も漸く固まり、重味も加わりつつある。もう一息で形がつくのだと思うが、この際日本山岳会としての強い支持は是非必要なのである。

支部との関係

日本山岳会とその支部との関係についても、この際はっきりしておきたいと思う。本部――という表現は少々ぎごちない言い方だが、会の理事会と地方の支部との間の意思の疏通は、もっともっとはからなければならない。

支部には支部の独立性のあることはもちろんだが、支部の計画に対して、東京の理事会は全く知らないというような状態は、早く改められなければなるまい。いや■

目次

■これからの方向……松方三郎…一
■昭和四十年度各会務担当理事の運営方針……二
■支部情報・東海及び関西……八
■会員通信
・ペルー通信……江上 康…七
・河口慧海誕生記念法要…小方全弘…七
・ゴジュンバカン通信…高橋 進…九
・カトマンズ通信……石原国利…一〇
・台湾山岳協会のプロフィル……余 初雄…一〇
■シカゴ山岳会々長ミセス・マレンを迎えて……杉浦耀子…六
■四十才からの建康法……脇坂順一…七
■台湾の登山について…折井健一…一一
■トピックス
内＝時又港跡碑除幕式……六
日本協会総会……六
＝国上高地ウェストン像前に立てる木版……八
外＝アメリカ便り……五
インド隊エベレス登頂……八
海＝ネパール政府による国内旅行禁止地域……一〇
■余滴 Mushao のこと……六
お客をにがす……七
エベレストの名称統一……一〇
■図書紹介……松田雄一…一二
■お知らせ
図書（一一）・会務報告（一二）
第九回マナスル会（一三）
「マナスル」の頒布（一三）
近藤、槙両名誉会員の叙勲（一四）
新入会員他（一四）
■ヒンツー・クシュの高峰一覧表……吉沢一郎 一五

昭和四十年度各担当理事の運営方針について

本年度は巻頭に松方会長が述べられた方針に基き、各担当理事は次の様な方針で運営していくことになった。

四月二十六日の理事・評議員会で分担の決った各担当理事は、直ちに運営方針について構想を練りその方針は五月十三日の理事・評議員会の席上、次の様に発表された。

海外連絡　松田雄一

従来より、この係は、主として目的を同じくする外国の山岳会、連盟、財団等とのCommunicationにあったが、今まではどちらかといえば消極的であった。この原因は係の怠慢でもあったが、語学力の不足による面も多かった。そこで今年は、その国の語学にすぐれ、又何等かの関係がある方に委員となっていただいて海外連絡委員会(Foreign Relation Committee)を作って積極的に活動したい。

▽海外連絡委員会の構成

フランス（近藤等）、イタリー・ネパール（日高信六郎）、インド・パキスタン（三田幸夫、丹部節雄）南米諸国・アメリカ（吉沢一郎）、アラスカ（高橋進）、ソ連（袋一平）、中華民国・韓国（折井健一）、スイス（芳野赳夫）、英国・ニュージーランド（望月達夫）、ドイツ・オーストリー（福田宏年・深田久弥）、事務局（松田雄一・倉知敬）

委員は必要に応じ増加することがある

▽委員会の運営法

毎月一回第三金曜日を定例委員会開催日とし情報の交換を行う。

事務局は担当委員には、関係文書は必ずまわし、窓口を統一し事務を重復しない様にし、又、訪日外国人の接待等について協力頂く。

▽係としての本年度具体的方針

(1)事務連絡の迅速化

(2)会誌交換の積極化……山岳五九年は二七ケ国四五団体に送付したが、カードを入れ Exchange Copy としての送付であることを強調した。

(3)海外登山情報の蒐集—海外在住会員、海外旅行会員にも協力を要請し積極的に集め、できる限り会報で紹介したい。

(4)訪日登山家の動向をつかみ、歓迎会を行いたい。尚日本の山の案内については指導委員の御援助を仰ぎたい。

(5)海外山岳会の行事に人を派遣したい—シャモニーの国際登山集会にも二名を派遣する予定。

(6)六十周年の行事にも予算があれば Invitation Card を出したい。

(7)Honorary Secretary —の名称を加藤、松田の二名が使用することを諒承願いたい。

会員係　深田久弥、杉浦耀子

▽会員係の方針

会員係とは今年度から新たに出来た係で、外国の山岳会にある Membership 担当役員のことである。

会員との連絡を密にし、会員相互の親睦を計ることを目的に会員サービスにつとめたい。具体案として次のような事を考えている。

一、会員の把握

(1)会員名簿作成・整理（別項参照）

(2)会員総数・会員番号の欠番調査

(3)入会・退会者等会員異動の把握

(4)会員の住所変更等の届出の徹底

二、会員の動向の把握

(1)会員の吉凶に関する報告

(2)会員の海外移住あるいは旅行に関する情報の入手

三、会費の徴収

滞納会費の督促を早急に行う。

また、会費の納入は毎年七月末日までに行うよう会員の協力を求める。

会費未納者の現況は別紙の通りであるが、三十九年度の未納会費が三分ノ一もあることは、会の運

■しくも日本山岳会○○支部と訌って企画されたことは、やはり一応は東京の理事会も承認していなければなるまい。支部も、日本山岳会の支部と看板に出す以上は、ことはその地方だけの問題ではなく、全日本に散在するほかの地域に存在する会員のことも考え、「日本山岳会」という以上は、六十年の歴史や、そのほかもろもろの、この名前に結びついた連想が、当然ついて廻ることなのだから、その点慎重であってほしいのである。

一口にいえば支部の行事でも、日本山岳会の支部の行事であれば、会員の誰がみても、日本山岳会の名を冠するに足ると思うようなものであり、またその進め方も、そうした進め方であってほしいのである。

会費の問題

ところで、新しい年度の冒頭に是非お願いしたいのは、会員の諸兄が、会費をちゃんと納めてほしいということだ。

ありのままをいえば、昨年度の会費をまだ納めていない会員は総数の三分の一におよんでいる。つまりこれらの会員は三分の二の、会費を納めている会員におんぶされている形なので、之はどう考えても感心した状態ではない。

もっとも徴収する側にも一半の責任はある。事務的にも甚だ怠慢であったように見えるし、遠慮が過ぎるようにも見える。どこの会でも、会費は年度が代れば直ぐ納めるのが常識だと思うが、わが日本山岳会は、年度が代ってからおもむろに、前年分の未収会費の催促を出すといったような、おっとりしたやり方だったのだ。会の財政収入の中心は、何といっても、会費なのだから、こうしたやり方は是非ビジネスらしく改めなければならないと思う。

エベレスト

最後にエベレストの問題について一口。いろいろ現地で難しい問題が起りつつあることは、会員の皆さん御承知の通りだが、会としては日本側の外交ルートを通じてはっきりできることは、あくまでもはっきりしたいと考えている。実はあの問題が起った時、早速カトマンズに飛んで行けという声もないではなかった。しかしわれわれは、第一に筋道を通して取運びたいと考えているし、ことに、ことあるごとにカトマンズに馳けこんでいくやり方に対しては、かなり疑問を抱いている。何よりもまずはっきりしていることは、ことがどう転がっても、エベレストが消えてなくなるわけではない。山登りの世界の有難いことは、山はとにかく、そこにあるということだ。われわれの方で見捨てない限り、機会は必ず来るという事だ。だから日本山岳会としてはあくまでも筋道を通して、忍耐強くことを取運んでいく積りである。

営を会費に依存している現在、大きな問題である。今年度より会費の納入月は七月であることをPRして、積極的に督促致したい。各位の御協力を切望する次第である。

尚五年間も会費を滞納したりした者にとっては全額を納付することは大変なことであるので、これらの会員のために復活制度があることをお知らせしておきます。但しこれが適用できるのは一回限りで、二度目からは入会金を支払って新番号になります。（詳しくは会員係にお尋ね下さい）

四、会報係と綿密に連絡をとり、折にふれ会員の動向、支部便り等を会報に掲載してもらう。

五、支部との連絡を密にし、各支部の行事、登山情報等を集める。

六、年次晩餐会的な会員親睦会を初夏～夏頃行うよう集会係に依頼する。

なお、会員係の業務は各係の間とも密接な関係を持つと同時に、会員各位の協力なくしては円滑に行うことが困難であるので、会員諸氏の御協力を切望したい。

▽名簿作成について

各個人にカードを送付し必要事項を記入した上で返送してもらう。これをもとにパンチカードを作成しルームに保存すると共に、名簿の原稿を作成し、できるだけ早く会員に配る。完成は九月の予定。また各支部名簿もルームに集めたい。

なお、会員名簿の編集は会員係の責任において行いたい。

▽ルームの整備について

一、ルーム備品の整理とリスト作成。

二、ルームの装飾。

三、ルームの移転時に他へ預けた物品の引取り及び保存。

四、ルームに登山情報等のファイルをおいて、会員の閲覧に供するようにする。

五、ルームの月間定例使用日の一覧表を作成し、会員に通知する。なお、現在までに決定したものは次の通りである。

第一月曜　海外登山懇談会（一般公開）
第一水曜　東京支部役員会
第一木曜　定例役員会
第二水曜　図書委員会
第三火曜　婦人部研究会
第三水曜　東京支部三水会（小集会）
第三金曜　海外連絡小委員会
第四月曜　東京支部婦人部集会
毎土曜（夕）土曜会

尚会員係の世話人として左記の方々にお願いし、いつきても楽しいルームにしたいと思う。

〔会員係〕深田久弥、杉浦耀子、神谷恭、折井健一、古沢肇、君島久登、松田雄一、山口節子、富田美智子、芳野菊子　以上十名

会費未納現況

（昭和40年4月末現在）

支部別＼年度別	35年	36年	37年	38年	39年
	人	人	人	人	人
東京	27	27	43	128	248
秋田	1	1	2	3	8
山形	1	1	1	3	6
宮城	2	2	1	4	9
福島	3	3	5	9	21
山梨	0	0	1	5	26
静岡	0	0	1	2	6
東海	2	2	5	15	32
信濃	11	11	23	38	61
越後	1	1	7	10	39
石川	0	0	0	2	3
富山	2	2	6	8	9
関西	0	0	0	1	1
福岡	8	8	23	53	113
熊本	1	1	5	7	9
大分	0	0	2	4	9
その他	0	0	3	3	8
	7	7	12	21	49
合計	66	66	140	316	657

図書

深田久弥、倉知　敬

特に今年度は取立てて新らしい方針はないが、前年度やりとげられなかった事柄を引続き続け、出来るだけ早い機会に完成させたいとこと三、四年の様子を見ると、図書に対する関心が薄くなる傾向にあるのはなげかわしいが、それだけに一層、図書の整備と充実に力を入れていきたいと思う。

今年度の事業予定は次の通りである。

(1)新規受入れの書籍一覧表を毎月の会報に記載する。
(2)洋書目録の完成。
(3)会員番号五〇〇番位までのレジスターの完成。
(4)推薦図書一〇〇冊の選定。
(5)日本の海外遠征隊の資料の整理
(6)現在、貸出は禁止だが、整理の完成出来次第、図書貸出規定をもうけ、何らかの形で貸出をするようにしたい。
(7)その他、利用価値少ない書籍の整理、新着図書欄の整備、部報・会報の整理、などに力を入れていきたい。

支部

渡辺公平

今年度は次の五点に重点をおきたい。

(1)現地小集会の開催
(2)会報の支部欄を充実したい。
(3)支部主催行事を調整し事前に連絡をとって昨秋の様に、各支部の行事を行う日時が重複しない様にしたい。
(4)支部主催の講習会等に積極的に講師を派遣したい。この点に就ては指導委員の協力をお願いする。
(5)ルームに〝支部情報〟のファイルをおいて会員に閲覧できる様にし、会員に各支部の活動状況を紹介したい。

なお支部担当理事をおく理由は地方支部が本部へ連絡する場合の窓口としてである。その意味で支部におかれても、連絡を密にしていただき度い。

会報編集

宮下秀樹

新任早々エライ仕事を命ぜられて弱っております。幸いベテランの吉沢大先輩が専任で全てを監督して下さるので、私としては原稿の催促係、兼発送係のようなものですが。

理事も大幅に入れ替り会長の施政方針にもみられる通り、会員相互の連絡を強化し、親睦を計るためには、先ず会報の充実をと、早速苛められまして、今年一年間の目標を次のように立て、少しでも皆様の御期待に副えるよう頑張ってみたいと思っております。

会員の皆様よりたくさんの投稿、連絡等をお待ちすると共に、絶大なる御支援、御協力の程、紙面を借りて御願い致します。

一、会報は毎月一回、十日発行とする。

二、原稿の締切は毎月十日とする。

三、出来るだけ新らしいニュースや、会の連絡事項を多く取り入れる。

四、各支部よりの連絡、各会員の通信、海外連絡、図書紹介、学生欄を充実する。

なお、会報編集委員の顔振れは編集後記に書いてあります。

指導　村木潤次郎、田辺寿、

竹田寛次

指導のポイントは一般指導及び学生部の強化である。特に学生部に対する働きかけを強くすることが本年度の会の大きな方針の一つであるが、その為に若い学生達に働きかける良い先輩達に集って貰って色々な世代を通して学生への働きかけを強く豊かなものにして内容的な指導の実を挙げ、同時に学生部でそだってくる人達を山岳会の組織につないで良い仲間を増やして行きたいと思う。その為に旧きより若きに亘って十七名の人達にお願いして日本山岳会学生部指導委員会を作り活動に入る。斯うした内容的思想的なてこ入れに対して、現状の組織の実態を良く捉えて先ず東京、次いで関東と、出来る限り学生山岳部のつながりを広め強化しそれに則り組織的な指導の実をあげたい。

一般指導面に関しては、積極的方策は未だ明確でないが、遭難の頻発する昨今忽がせに出来ないことである。特に「指導」ということは、研究調査遭難対策と密接に関連があるので、各担当理事と密接に連絡をとってやって行きたい。そして前述の学生部指導委員会の強化によって各方面よりの講師その他の依頼には積極的に応えたい。

尚学生部指導委員会のメンバーは次の通りである。

加藤泰安、藤井運平、辰沼広吉、村木潤次郎、大塚博美、川上隆、住吉仙也、松田雄一、宮下秀樹、田辺寿、高橋　進、川崎　巌、神崎忠男、宮崎紘一、中川　武、尾上　昇、小林正尚以上十八名。

関西支部指導　住吉仙也

昨年度は支部としての学生部の指導活動は行っていなかったが、今年度は関西学生山岳連盟（約三十校が加盟している）に対し、日本山岳会に対する希望をださせ、できる限り、学生との接触を持つ様心がけていきたい。

海外登山　大塚博美

▽海外登山懇談会の開設。

近年、海外登山が頗る盛んとなり、会員も数多く海外登山を行っておりますが、計画を持つ会員に対するサービスのために、本年度から月に一度懇談を行い、正確な海外情報提供計画、質疑応答などを行う懇談会を設けますのでご利用下さい。

記

一名　称、海外登山懇談会
一開　設日、毎月第一月曜日、午後六時より
一場　所、日本山岳会ルーム
一メンバー、世界各地の登山精通者並びに一般会員（自由公開）
一要　領、希望者は前月末までに質問事項をハガキにて申し込むこと。

一海外登山委員会

従来より設置しておりました本会の海外登山審議委員会は、諸般の情勢により解散し、新たに標記の委員会を設置しました。

また委員会の規定については、新委員会で目下検討中でありますので近くお知らせいたします。

新委員として、委員長に三田幸夫、委員に小原勝郎、加藤泰安、堀田弥一、深田久弥、吉沢一郎、辰沼広吉、金坂一郎、村木潤次郎、松田雄一、大塚博美の各氏が選出されました。

「山岳」編集　深田久弥　望月達夫

今年度（第六〇年）の新機軸としては、頁数をへらして二〇〇頁位でおさえるつもりであること、又、内容の方では、海外登山記録の他に成瀬氏の古い知床の記録を追加したこと、などである。発行期日は一月頃、出来れば年次晩餐会前には上げる様努力する。

大体の掲載記事は次の通りである。

○古原　和美「ギャチュン・カン登頂」
○鈴木　武夫「ランタン・ヒマール、一九六四年」
○山野井武夫「バルンの山へ」
○向　一陽「ボリビア・アンデス、一九六四年」
○宮野　準治「エクアドル・アンデス、一九六四年」
○浅野　清彦「セント・エライアイス」
○北村　泰一「ブラック・バーン」
○関西学院「マウント・ローガン」
○川崎　巌「マウント・ローガン」
○島　澄夫「グレイシアー・ドーム」
○樋口　明生「アンナプルナ・サウス」
○吉沢　一郎「ヒンズークシュ覚書」
○成瀬　岩雄「知床半島の旅」
○追　悼――高野鷹蔵、吉川良平、三輪　孝、篠原敏弘の各氏
○田中栄蔵・馬場勝嘉「ヒマラヤ登山年譜（続）」
○会務報告・英文梗概

山日記編集　皆川完一

昨年度は発行が遅れ御迷惑を掛けましたが、本年は十一月十五日発行を目標に大いに馬力を掛けるつもりです。

編集委員に大貫良夫氏、新しく交通新聞の水野弥彦氏を迎えて主に調査記事を担当して頂きますが、本年度の主な修正としては次の事を考えております。

一、日記欄を集約した予定表と日付の横に自由記入欄を設けたい
一、行程表を全て新しい形式に統一したい。
一、山小舎も随分変更が多いので一応整理する積りである。
一、山の医学欄を危急時、直ちに利用出来るよう表形式に改めてみようと検討中である。

猶、公開の編集委員会を開催して大いに皆様の御意見を承賜り度く、御協力お願い致します。

自然保護　杉浦耀子

従来より本会内には自然保護委員会が組織されていたが、具体的には活動していなかった。

本年度は松方会長、村井評議員、交野評議員等と相談して、更めて委員会を構成し、協議の上、具体案を作り活動していく予定である。

研究調査　田村扇一

一、従来は医学に重点がおかれていましたが本年度からは他のものも加えてゆく考えでおります
二、本年度対象とする部門は「医学」「気象」「雪崩」「用具」とし、調査を進める考えでおります。
三、研究調査の第一段階としてまず資料の収集を中心として仕事をすすめたいと考えています。
四、研究調査は持続させねばならぬのでそのような組織を作りあげるようにしたいと思います。
五、各部門毎に委員会を設置して必要ならば更に其の専門毎に細分して活動をするようにしていきたいと思っています。

▽雪崩研究委員会

⊙金坂一郎、大塚博美、塚越雅則、川上隆、○田村扇一

▽高所医学研究委員会

⊙辰沼広吉、武藤晃、住吉仙也、

杉浦耀子、○田村扇一
▽登山用具研究委員会
▽山岳気象研究委員会　委員未定
（◉委員長、○事務局）

遭難対策　辰沼広吉

一、遭難に関する調査、原因等について現在迄の集積を更に継続するため相沢、芳野、徳久の委員をもって組織する。
二、対策に関しては最近政府、日本山岳協会、日本山岳会、日本山岳連盟山の遭難対策協議会等により論議され実施の階段にあり、緊急にこれが方針について日本山岳会の方針を再検討する
三、日本山岳会支部の遭難対策も現行では組織上種々困難なる点もあるので、これが方策につき支部長の意見を聴取検討することとする。

集　会　川崎　巌

一、総会的な集会としては、年次晩餐会がありますが、会員係から提案のあった夏期にもう一回これに代るようなものを増すことを考えている。特に六十周年記念事業に関連した集会を一回やりたい。
二、各支部の集会、各担当部門で主催される小委員会、研究会、講演会等の連絡調整をはかり集会係としても積極的にこれに協力していきたいので、地方支部にて計画をお持ちの場合は事前に担当理事迄お知らせ下さい。
三、外国からの来訪者を迎えての講演会等はそのつど総務関係と連絡をとりながら会報を通じて集会通知をする。
四、月例理事会の際、集会の必要を生じた場合は集会を開いていく。
五、集会通知は原則として会報を通じて通知する様に致したい。

経　理　飯野　亨

㈠　本年度の施策に即応した資金配分を行うよう弾力的に考えるが、経理処理態度としては、資金の効率運用とともに、この面から諸施策実現を管理促進して行きたい。
㈡　資金確保の観点から、収入源の大宗である会費の徴収方法に銀行振込制度を考える外、会費納入期を定める等改善を図りたい。
㈢　支払については、明確化効率化を期するため、支払に関する簡単な規定をつくり実施したい。具体的には理事会で決定したいが、案としては、支払請求方法及び一定額以上については事前に、総務経理でチェックするような仕組を考えている。
㈣　予算の立案について手続が明確になっていないので、これを確定し、予算により会の施策が或る程度はわかるようにするとともに予算立案の責任体制を確立したい。
㈤　本年度は重点施策の関係から予算に或る程度変更を加える必要があるので、施策中予算を伴うものは、極力事前に届出るようにきめておきたい。

山小屋管理　飯野　亨

今年度、神河内山荘の運営方針は次の通りである。昨年度は会員の利用が少なかったが、今年度は積極的に利用されることを切望している。
㈠　会員の利用を増進する施策を講じたい。
㈡　本年度中に電灯及び電話の引込を実現したい。
㈢　敷地の拡大を図りたい。
㈣　具体的な諸施策については六月初旬現地で委員会を開いて決定したい。
尚本年度の山荘運営委員会委員は次の通りである。
高山忠四朗、小里頼忠、百瀬一茂、赤羽孝一郎、村上守（以上信濃支部）、折井健一、飯野亨、君島久登　以上八名

庶　務　松田雄一

今年度庶務係としては次の点に重点をおいて事務処理を行いたい。
(1)本会内規の整理
従来より海外登山審議委員会規定、山荘管理規定、エベレスト委員会規約、学生部規約等があり、又各支部にも支部規定があるが、ルームにこれらの規定がまとめてないので、この際これら内規をはっきりと整理し、必要なもので、現在作られていない規約等あれば新たに作り会のルールを確立致し度い。
(2)事務用品を整備する。
昨今会務も量的に非常に増えてきているので事務機械（リコピー等）を入れて事務能率を高めたい。又必要な事務用箋、カード等も整えたい。（以上）

アメリカ便り

H. Adams Carter, the Chief Editor of the American Alpine Journal からはショッ中手紙が来るが、最近のものをご紹介しておきましょう。

北米で最高の未登峰と思われる山が三月末に登られました。この山は前にはハバード東峰（約四二二一メートル）と呼ばれ、アラスカ・ユーコンの国境が西に曲る角にあります（エライアスの東方、ヤクタト湾の奥に当る）。この山は一九三五年にB・ウォッシュバーンと私が発見したものですが、昨秋故ケネディ大統領の名をとってケネディ峰と名ずけられました。この三月、J・ホイッテカーとB・プラザー（二人とも一九六三年エベレスト）J・クレイグ、G・セナー、D・モールナー、B・プレーター、W・アラードの七人があらに行ってルートを整備しておき、R・ケネディ上院議員の来るのを待って一緒に登った訳です。ロバートを待つ間に七人はハバード（四五五七メートル）の第二登をやりました。

King George (3749m) の初登頂をB・エバレット隊がやった（四月八日）というニュースが、つい先頃入りました。この山も前記の一九三五年隊が発見したものです。エバレット隊は尚四月十六日にケネディー山の第二登をやりました。キング・ジョージの方もアレン・ランドール隊（シャトル）が二週間後第二登をしました。

B・ビショップはカンチが不許可でマッキンレー南壁に変えました。

●悲しい知らせを一つ。D・ドゥディ（一九六三年エベレスト）とC・メリヒュー（カラコルムとペルー）の二人が、三月二十八日に、ワシントン山のハンティントン谷にあるピナクル・ガリーで氷壁を登攀中墜死しました。ここは難しいが特にどうというところではなかったのです。二人はこの夏ヒンヅー・クシュに行くための練習に出かけた訳で、まことに惜しいことをしたものです。

◇

GaurisankarAuee

英国の現代一流のクライマー、D・ウィランスとI・クロウを含む六人の隊が、昨年十月ガウリサンカールに挑んだが、何日もの苦闘の末敗退した。到達高度は約六五五〇m。可能性はやはりチベット側との結論なり。

（吉沢一郎）

シカゴ山岳会長 ミセス・マレンを迎えて

杉浦耀子

「シカゴ山岳会の会長が来日しています。山に案内してあげて下さい」。四月中旬、佐藤テルさんからこんな依頼をうけた。

第一ホテルで会った親しみやすい老婦人は、Dr. Frances A. Mullen といい東京で開かれた身体不自由児のリハビリテイションに関する国際会議に出席のため来日され、滞日の第一週を会議に、残りの第二週を山で過したいというのである。何をおいても山へという言葉に人種を越えた「山を愛する」山仲間の心に触れた思いで、私たちはすっかり感激してしまった。

突然の出来事で時間の繰り合せに苦労したが、翌々日には準備も整い八方尾根へと向った。一行はマレンさんとその息子さん、山仲間のもう一人の小柄な老婦人、それに案内の私たち計六名。丁度桜・桃・アンズなどの花のまっさかりで中央線沿線は美しく彩られ楽しい汽車の旅を満喫して、その夜は八方山荘へ泊った。車中、日本へ来る前に旅したというネパール、カトマンズからタンボチェへの話を聞く。山好きのおばあちゃんが三人でエベレスト見物に行って来たのだという。その足で日本に来て、又アルプスへ登りたいという熱心さに圧倒される思い。

翌日は心配された天候も、下界は曇り山は晴れと幸運に恵まれ唐松岳をめざす。第三ケルンで私たち手づくりの弁当を食べる。爺から白馬まで後立山の展望が素晴らしい。肥っているので歩くのこそ早くないが実に元気である。第二、あるいは第三ケルンから下って行くスキーヤーに別れ、更に登る。ときどき落ちる雪崩がこだまする以外、山は全くしずかだ。牛首の下まで行ったがあいにく黒部側は雲が多く、剱、立山を望めそうもないので引き返す。

最終のケーブルに大急ぎで飛び乗り、その夜は葛温泉に案内した。お風呂を楽しむことを知らない彼女らに温泉の楽しさを教えたおかげで半時間以上もねばられた。山奥深い出湯の夜も、彼女の訪れたという世界の山々、ヒマラヤ、アルプス、ニュージーランド、南米、ロッキーあるいは日本アルプスなどの話が遅くまで続いた。

一日おいた次の二日間は、静岡支部の山本氏が富士山の案内を引き受けて下さった。測候所のジープで御殿場側を二合目迄行き、二合五勺あたりまで登ったが、風が強く霧も濃く、その上前日の降雪のため足元もよくなかったのでここで下山した。霧の晴れ間に僅かに頂上が望めたにすぎなかったのは残念だったが、この山行では前夜泊った「青年の家」の経験が非常に面白かったと話していた。山本氏とは、偶然土曜会でお会いしただけなのに、青年の家の特別室予約から、測候所への依頼、更に自ら車を運転しての御案内等非常にお世話になった。

帰京した翌日、文字通りフルに山を楽しんだマレンさんは元気に帰国の途についた。

四月十七日の土曜会にルームに案内し、何人かの会員にお目にかかって歓談されたが、もっと多勢の人々に会えなかったことを残念がっていた。その折、マナスル「一九五四～五六」山岳五九年を寄贈した。

なお、彼女は「シカゴ山岳会は会員一五〇名足らずの会にすぎませんが、皆熱心なクライマーです。女の人もいますが、一部を除いては余り活躍していません。Wisconsin 周辺の山々がトレーニングの場です」と語っていた。

(65・5・20)

時又港跡碑除幕式

ウェストン師の紹介により天竜川下りは多くの外国の人に親しまれた。

この度飯田市長松井卓治氏、天竜峡の今村良夫氏等が発起人となり、ウェストン師を偲び、時又港跡に時又碑が完成した。

時又港は往年の川下りの港で、東洋の絶勝と称された激流三十里の舟旅と、天竜下りの人々が此の地から発船した。殊に明治、大正年間にはコンノート殿下一行を始め多くの外国人（主に英国）が此の地の山河と人々に親しんだ。

そこで、初期の紹介者ウォルター・ウェストン師を偲んで建碑することになった訳で、碑石には、小松石を充て、台石と台座には、ウェストン師足跡の各地の産石を配した。碑文はウェストン師の Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps の原著より、写真拡大したものに、同師のサインを添え、訳文は本会会員岡村精一氏、揮毫は石橋犀永氏によった由である。除幕式は五月九日午後三時より駐日英国大使夫妻、日英協会理事長西春彦氏等を迎えて盛大に行われた。本会からは信濃支部から出席した。（松田）

日ネ協会総会

昨秋発足した日本ネパール文化協会では、去る五月十五日（土）午後一時半より麻布国際文化会館に於て、昭和四十年度通常総会を開催した。本会からも、折井、野口、織内、沼倉、加藤、松田はじめ多数出席し盛会であった。尚総会終了後、「ネパールの四年間」と題して神原達氏、「ネパール農業援助事情」と題して栗田匡一氏の講演があり、引つづいて日本工営株式会社製作のカルナリ河電源開発の記録映画が上映された。

（松田）

Mushao のこと

古い本を読んでいると時々ハッと思うことにぶつかるものだ。最近 Hindu Kush の探検記を整理していて、棚晒しになっていた O. Olufsen の "Through the Unknown Pamirs"—The Second Danish Pamir Expedition (1898-99), London, William Heinemann, 1904 というのを読んだ。

その十八頁の下の方に次のようなことが出ていた。

——イシュトラーグ峠の西、アルカリ河とヤルクーン谷の間に、H・K の最高峰群が二つの別々の巨峰となって聳えているが、北の方のを Nushau といい 7460 m その氷河はイシュカシムのランの町からも瞭きり認めることが出来る。南の方のは Tirach Mir といい、高さは 7463 m, 氷河の様相としては世界でも最も素晴しいものの一つである。——両峰とも高さは三角測量だけであるから非常に正確だとはいえないまでも、恐らくひどい間違いはないように思う。——Mushao というのは今年の「山日記」にも書いておいた通り Noshaq のことだろうと思っていたが、前記の本を読んで Mushao の前にまだ Nushau という表現のあったことを初めて知った。Lunkho もこの時既に 6900 m となっている。

（吉沢）

四十才からの健康法

脇坂順一

山に登るには何と云っても先ず健康な身体が必要である。従って、若い頃のスタミナを壮年老年に至るまで維持出来るとすれば、それだけよけいに山にも親しめる訳である。学生時代の岳友の多くが四十才を過ぎるとぼつ〳〵山から遠ざかって行くのを見ると実に惜しい気がする。いつまでも若さを保ち、現役の諸君なみに山に行けるためには、日頃身体を大切に、損うことのないように節制に心掛けると共に、更に積極的に鍛練することが肝要だと思う。

昨年私は外遊に際しヨーロッパ、アフリカ、イランに於ける医学視察や学術講演のついでにグロスグロックナー（オーストリヤの最高峰、三七九八米）、アイガー三七九〇米、西壁登攀）、マッターホルン（四五〇五米、再登頂）、モンテローザ（スイスの最高峰？四六三四米）、モンブラン（ヨーロッパ最高？四八〇六米）、キリマンジャロ（アフリカの最高峰、六〇一〇米）、デマベント（中近東の最高峰、五七七二米）等の登頂をなし遂げたが、五十才を過ぎた身体で一シーズンにこれだけの峻峰に登り得たことは、ひとえに日頃のトレイニングと節制の御蔭だと思っている。よく人に健康法を尋ねられるので、私なりの健康法を次に記してみたい。

先ず七時半に起床する。前夜何時に就寝しようが起床時間に変りはない。いつも熟睡出来るのでこの点有難い。洗面後、全身の冷水摩擦を行なう。これが約七分。次いで足の屈伸運動（膝を曲げてしゃがんでは起立する）を一五〇—一七〇回、腕立伏（高さ七〇糎の台の端に両手をついての腕立伏）三〇〇回以上、懸垂運動二〇回を含む全身体操を約一五分。それから縄飛び三〇〇回以上、マスター（凸状の台）を用いての上下運動一〇〇回。最後に深呼吸をやるが、以上およそ三〇分間を要することになる。その間、勿論パンツ一つの裸体でやるが、これだけやると冬でも汗ばんで来る。この日課をやった後のすがすがしさは又一入である。それに引かえ、旅行中などでこれの出来なかった日は一日中何だかだらしないような異和感を覚える。

尚、私は元来寒さには鈍感で、平地では真冬でもワイシャツの下は夏の薄い半袖のシャツ一枚とステテコだけ、勿論外套や手袋は用いない。又歩くことも大切で、急ぎの用件がない限り大いに歩く事にしている。エレベーターなども殆んど乗らずに努めて階段を登る。

次に食事のことであるが、朝食は野菜や果物をジューサーにかけてコップ二杯、それにビスケット（ビスマート）二切れ。昼食はリンゴ一つにし、牛乳一本、ビスコ六個。夕食の主食は豆腐一丁かそば（棒状に乾燥したもの五〇グラム）に昆布や海苔や小魚、鰹節を混じて煮たもの、副食は家族と同じものである。米飯や動物性脂肪食はてき面に肥えるので努めて避けている。

以上の方法は八年前の元旦から始め、今日なお欠かさずに実行しているが、当時体重八〇キロに肥満していた身体も六四キロ内外、血圧も正常を維持するようになり、頗る調子がよい。それに禁酒、禁煙もまた健康によいのではないかと思っている。

以上、私なりの健康法を略記したが、まだ五十才を少し過ぎた位なので、長寿法とはいえないかも知れないが、少なくとも私の健康にとっては非常に有効であったと思う。この分ではまだまだ山に親しめると思うので、壮年の諸賢に何等かの御参考ともなり得ればと思い、駄文を草した次第である。

私共御互に健康に注意して夫々の職務を全うすると共に、いつまでも若さを保持して好きな山登りを末長く続けたいものである。

——・——・——・——

附記。右に記した運動の回数は初めからこの通り実行することは無理で、日を重ねるにつれて増してくるものである。例えば縄飛びなど初めの頃はせいぜい五〇回位が、今では一気に二〇〇回位迄はやれるようになった。少しずつ増して行くとよいと思う。

（日本山岳会会員、久留米大学医学部外科学教授）

ペルー通信（1）

江上康

出発前は種々と御厚情にあずかり深く感謝いたしております。

いまペルーのリマにおります。先発隊（前芝君ら五人）はすでにクスコに先行し、出発村のモエパタを調べたりしております。カルカッタのバルワラ氏みたいにやり手の Agent がいないで、それにのんびり国の南米ですのでもう十日もリマにおります。

明日K・2の隊員 Mr. Mario Fantin と二人で、Sr. Morales（ペルー山岳会会長）のお宅に招かれております。Fantin 氏からは「I Quattordici "8000" Antologia」という新著をみせてもらいました。アピは初登頂だといってくれたので〝いやバレンギー氏が登っているかも知れない〟といったらモラレス氏と二人で日本人は紳士だとおせじをいってくれました。山岳会の皆様によろしくお伝え下さい。ではまたお便りします。

（リマにて、松田宛）

◇お客をにがす◇

五月十七日付の手紙をスペイン山岳連盟会長フェリックス・メンデス氏から受取った。最近結婚した二人が東京へ行ったので、あなたを訪問するため日本山岳会へ行ったところ、吉沢はいないと断られたと書いてあった。言葉のわからない事務の人を責めることは出来ないが、これが事実なら困ったことだ。

（吉沢）

河口慧海生誕百年記念法要

五月二十二日午後、九品仏浄真寺で、日本人として、はじめてヒマラヤに入った河口慧海師の生誕記念法要が営まれた。浄真寺住職の清水順碩師の読経、さらに同寺の庭にある碑前で服部融泰氏の読経があり、その後、席を改めて参列者によって慧海師の追憶談にしばし時の経つのを忘れた。

特に会員川喜田二郎氏が「慧海師は、ただ勇気に富み、実行力があったばかりでなく、非常に科学的であった。慧海師の著述は、現在もなお、学術的価値がある」と話されたのは、八十余名の参列者に、いまさらながら、師の偉大さを痛感させた。

この日、本会からも、松方三郎会長、日高信六郎前会長らが、参列した。

小方全弘（毎日新聞ヒマラヤ事務局）

▼上段？印のこと▼スイス国内の最高峰はドーム（四五五五m）、ヨーロッパの最高峰はコーカサスのエルブルーズ（五五九五m）で、モンブラン（四八一〇m）はアルプスの最高峰と思いますが如何でしょう。尚、アイガーは三九七五m、モンテローザは四六三八m、キリマンジャロは五八九三か五m位でしょうか。（山日記その他による）—吉沢—

〝上高地ウェストン像前に立てる木版の説明文〟

ウォルター・ウェストン師
英国山岳会会員
英国地理学協会会員
日本山岳会名誉会員

▽ウェストン師は一八六一年英国に生れ、ケンブリッジ大学卒業後、英国教会の牧師となり、一九四〇年その長い生涯を閉じるまで一人の聖職者として終始した。

▽ウェストン師と日本との関係は長く、かつ、深い。日本とその自然を愛すること、彼がごときも、また稀であった。

▽彼の日本における登山は、遠く明治二十年代にさかのぼる。いわばわが近代登山の黎明期に属する数少ない登山家の一人であった。

一八九六年（明治二十九年）彼がロンドンで公けにした「日本アルプスの登山と探検」は、登山家としての彼の名を不朽のものとしたものだが、日本の山はこの書によって初めて海外に広く紹介された。その「日本アルプス」なる呼称もここに初めて書名に用いられ一段と普及するにいたった。

▽日本滞在は前後三回、通算十数年に及ぶが、上高地はことに彼の愛惜したところであった。

日本山岳会は昭和十二年生誕七十七年に当って、ここに彼の鋳像を納め、彼が日本登山界に遺した功を称えたが、年を同じくしてわが国は、勲四等瑞宝章を贈って、多年にわたるその友誼に酬いるところがあった。（松方）

インド隊エベレスト登頂

インド登山財団（Indian Mountaineering Foundation）が派遣したエベレスト登山隊は、サウス・コルより、悪天のため一たん前進基地に下山して登頂の機をうかがっていたが、五月二十日第一次登頂隊、ナワン・ゴムブ、チーマ大尉の両名は8531mの最終キャンプ（これは史上最高のキャンプ）を五時に出発、四時間半の行動のち、午前九時三〇分登頂に成功した。

ついで五月二十二日には、第二登頂隊のソーナム・ギャッツオ、ソナム・バンディヤル両隊員が再び頂上に立った。

更に五月二十四日には、C・P・ボーラ隊員とシェルパのアン・カミが第三登に成功した模様である。

五月二十九日には更にアール・ワリア、ラワット、シェルパのプー・ドルジェの三人が第四登にも成功した。

本会からは早速、インド登山財団、カトマンズ、インド大使館気付にてコリー隊長並びに駐日インド大使等に祝電を送ったが、これに対し五月二十四日インド登山財団サリン氏より次の通り返電があった。

22- KX 105/E 39/WTB 5011/KJJ 2461/LNB 1290/DS 312 NEW DELHI ITO 48 22 2140
HAPIG INSUFF ADDR LTF JAPANESE ALPINE CLUB TOKYO (DEL TO NIPPON SANGAKU-KAI GAIEN-CORP NAI JINGUMAE SHIBUYAKU)
Deeply touched by your message. Am sending to our expedition over wireless and am certain they would all be happy to receive it. For us it is fulfilment of our longstanding hopes and expectations.Sarin Indmount

（松田）

支部情報

○東海支部

かねてより東海支部では、本年秋、マカルー遠征を企画していたが、ネパールの登山禁止令などでその実現が不可能となり、その後の進展が注目されていたが、この程、同支部より次の様な報告が寄せられた。

すなわち、

(1)マカルー登山計画は、さる三月ネパール政府の禁止令により、予定の期日に実行することが不可能となった。

(2)石原国利氏が現地へ行き、交渉したが、ネパールの政情不安という理由は如何ともし難く、無期延期の止むなきに至った。

(3)但し、計画自体を中止する意向はなく、ネパール以外の確実に入国出来る国へ転進することに決定、目標を南米アコンカグア山周辺及びパタゴニア地方に選び、すでに通関の交渉を開始した。

(4)遠征の期間は一九六五年一〇月から一九六六年三月の予定。

(5)高度克服のため行って来た低圧実験に関し、去る五月二〇日及び二四日の両日、NHKテレビで「科学時代」と称する題目の下に中間報告を行った。　以上

一九六五年度

日本山岳会関西支部総会

昭和四十年五月二十六日（水）
午後六時半より
大阪市西区靱公園内
スポーツマンクラブ五階

議事

開会の辞　梶本委員
支部長挨拶　水野支部長
一九六四年度事業報告　水野政委員
一九六四年度会計報告　岡田委員
一九六四年度会計監査報告　二木監事
一九六五年度役員選出（後出）
右四項全員承認
閉会の辞

× × ×

続いて三和銀行提供の総天然色映画「日本の国立公園」――〝本州の山〟及び〝北海道の自然〟の二本を映写。

× × ×

一九六五年度の委員、監事は左記の通りです。

		会員番号
一、委員	今西　寿雄（再任）	一六四九
	梶本徳次郎　〃	三二四二
	大賀　寿二　〃	三二五六
	余部　守男　〃	三二八三
	岸田　権二　〃	三三〇四
	松丸　秀夫　〃	三五〇三
	大木保太郎　〃	四〇六〇
	水野　政博　〃	四二七二
	阿部　和行　〃	四四九八
	寺本晃（水辺）　〃	四六〇三
	中島　道郎　〃	四六四四
	住吉　仙也　〃	四六七五
	田淵　邦彦　〃	四六九一
	西川　元夫　〃	四八八七
	岡田　博司　〃	四九二〇
	伊藤　祐彦　〃	四九五一
	小笹　孝　〃	五〇四一
	平林　克敏　〃	五〇七二
	伴　明　〃	五一二九
	桑田　結　〃	五二六二
	平野　征人　〃	五二六七
	金井　健二　〃	五三一四
	白石　裕　〃	五三七〇
	宮本　定雄　〃	五七四六
	林　茂　〃	五八四七
	宗実　慶子（新任）	五〇〇八
一、監事	二木　信次（再任）	九一〇
	仲西政一郎　〃	二二一九

なお支部長及び支部評議員は規約により本年は改選がありませんでした。

会員通信

ゴジュンバカン通信

ベースキャンプにて

四月二十六日

高橋　進

大塚博美宛

登頂に成功し全員無事に下山しました。全くホッとしています。この山が、こんなにきびしく、アイスフォールが、危険に満ちているとは想像もしていませんでした。二十四日私達が撤収して下山したときにはC_1〜B・C間の第一のアイスフォールは全く形相を一変し、登路になっていた一帯の氷の壁は殆んど崩れ、以前の面影をとどめておりませんでした。ルートは全部破壊されており、一人ではとても下れぬ位でした。八粍の赤い固定ロープが、氷の崩壊と落石に埋まって、所々赤くよごれた残がいをさらしているのが、このアイスフォールの動きのすざまじさをまざ〳〵と物語っています。

ここの降りの一番危険な一時間位は全く生きた心地がしませんでしたが、どうやら抜け切りました。それにしても去年のギャチュンカン隊の時とはこんなにも様子が違うものでせうか。去年長野隊に参加したシエルパのドルジエ、ペンバそしてローカルポーターのナムギャルなどが異口同音に、同じアイスフォールとは思えない、と申しております。山は生きております。特に今年は異例と思える程のアイスフォールの活動は激しいものですが、何に原因するものか調べて見たいと思います。私達は皆ヒマラヤ初見参で、誰もヒマラヤのアイスフォールの経験はありませんが、出発前に、調べたり、聞いたりしたものとは天地の相違です。これ程、激しく活動するものとは誰が予測出来るでせうか、年中ヒマラヤ山中に入っているシエルパですらこのざまですから、日本人の登山者が三、四回のヒマラヤ行ですべて知っていると思ったら全く笑止千万といいたいところです。

インド隊のエベレストでもシエルパが二人死んだニュースを山で知りましたが、未だどこでやられたかは知りません。三回目のインド隊としては、ルートやエベレストについては可成り知っている訳ですが、それでもやられるということは、山登りと遭難が切り離せない宿命であることは別として、今年は異常な変化が、このソロクーンブ地区のヒマラヤ山群にあったのではないかと想像し、早大のローツエシャールも気にかかる次第です。ですから、今年のヒマラヤ登山隊のレポートを全部集めて、気象との関連をにらみ合せ研究して見る必要を感じております。

それにしても、長尾ドクターはケガ人の手当で、殆んどベースキャンプに釘付けされ、少しも登山活動が出来ぬ状態です。山が好きなことは人後に落ちないドクターが、任務の完遂のためとはいえ登山をあきらめ治療に専念している姿には本当に頭の下る思いでした。又すまないと思うのは隠せません。とに角慈恵医大山岳部というものは、大したところです。こんな立派な先生がいるんですもの、矢張り真剣に山登りする奴は、どこでも同じだということですね。

昨二十五日は、ささやかなお祝いをしました。といってもウイスキー二本、インド隊にもらったブランデー一本ですからホンノ真似ごとです。それでもシエルパ、ローカルポーターを含め、この困難で危険だったいくつかの関門を経て頂上に立った喜びを心から分ち合いました。そこには国籍を離れ、使用人と主人とかいう関係を抜きにして、真に山で結ばれた友情だけが、ほの暗いローソクのほのほにもえて、光を放っているようでした。そして隊長としての私は、とに角、皆が元気でこうして祝杯を上げることの満足感より先に、無事であったことを感謝する気持で一パイ、今は何も申すこともありません。ややもすると感傷的になって、すぐに涙が出そうになります。

カトマンズを意気揚々と出発した二月二十六日から今日までの約二ケ月のことが走馬灯のように浮びます。楽しかったキャラバン、途中でインドのビッグパーティに会い、大がかりなのに驚いたり、ジャンやロキシーを呑み過ぎたり、ヒラリーの残した業績の大きいのに今更のように人間ヒラリーの一面に感心したり、そして、ナムチェに三月十六日に到着して以来、連日の降雪、ポーターの不足（インド隊、早大隊が先発したため）それに加えてローカルポーターの装備として、スリーピングバッグをどうしても用意しなければならなくなり、苦心さんたんしてかけずり廻りやっと一ケ二〇〇〜三〇〇ルピーも出して買い集めたことなど、キャラバンの楽しさに反比例してナムチェ以降は全くシゴカレ通しでした。BCを五〇〇〇米三月二十二日に入り、C^1を五、七三〇米に二十六日、そして入沢の負傷（二十九日）C_2を六、〇〇〇米A・B・Cとして四月十日、ドルジエの負傷（四月七日）、C_3を六、五〇〇米、四月十八日に、C_4六、八〇〇米を四月二十一日に、それぞれキャンプを進めて来たことを思い返しても、ベースキャンプ以来の一ケ月間というものは、全く夢のような、否生涯忘れることの出来ない強い印象を私達に与えてくれました。

初めてB・Cで見たときはゴジュンバカンとチョオユーⅡの双方を登ってやらうと思っていました。下から見るとゴジュンバカンはやさしく、その上近く見えますが、どうしてどうして、ギャチュンカンよりも遠くそして、その頂きへの道もはるかにけわしいものです。雪がクズレた位に見えたアイスフォールの一つ一つに全くシゴカレましたが、私の素直な気持として、まだ、心の整理のつかぬままにぼんやり感じていることは、登山の安全限界、困難と危険の境目についてです。日頃、「危険は冒すべからず」が私達の登山方法であったことを思い返して見ますと、二人もケガ人を出し、なおかつ危険に満ちたルート以外に道はないという状況でなお登山をつづけるべきか否か、私には私のとった処置が正しかったかどうか疑問です。この深い疑問を抱いたまま山を下らなければなりません。山は人間の感傷が入る余地が少しもないほど、きびしいものでした。特に私達の前にあったゴジュンバカンは。

しかし、こうした間にあって微力な隊長をよく助けてくれたのは、隊員、シエルパ全員のチームワークでしょう。最近今の若い連中は云々……ということがよく云われますが、平均年令二十七才の若い隊の中で特に若い二十六才以下の連中のバイタリティーはかつ目に値いしますそして皆んな凄くいい奴でよくやってくれました。

私としても大げさに云えば困難な条件下という特殊な状況の中での経験でありますが、彼等の活躍ぶりを見て、人間性に対する信頼をとり戻した感じがあります。この美しく、尊いものこそ、山登りの余慶として最上のものではないでしょうか。頂上に立った植村もよく頑張ってくれました。C_4から一、〇〇〇米以上あったので届くかどうか心配でしたが、途中ビバークして無事に帰って来たのはさすがでした。疲れたので皆に便り出せませんので宜しくお伝え下さい。JACの方々にも呉々も宜しく。

ネパール政府による国内旅行禁止地域について

ネパール外務省は三月二十日申請中のすべての Expedition に対し、登山を禁止する旨発表したが、ネパール国内の旅行は全面的に禁止された訳ではない。北部のチベットとの国境にそって約二五哩の幅で、無人地帯（外国人が入れない）を作っているが、その南側の旅行は許可されている。この程、東海支部長石原氏から松方会長宛にとどいた、ネパール政府外務省が国内旅行希望の外国人に渡している禁止地域の一覧表は左記の通りである（松田）。

ネパール政府外務省が国内旅行希望外国人に渡している禁止地域一覧表

District	Prohibited Areas
1) Baitadi	Byas Garkha
2) Doti Bajhang)	Not permitted areas north of Talkot
3) Jumla	(a) Humla Dara (b) Mugudara (c) Karandara
4) Baglung	(a) Chharka Bhot (b) Mustang Bhot
5) West No. 3	(a) Manang Bhot (b) Bhot 3 Gauns
6) West No. 2	Larkya Bhot
7) West No. 1	(a) Siyar Bhot (b) From Bidriv towards North Rasuwa Galhi
8) East No. 1	(a) North from Bhairabkund (b) North from Tatapani
9) East No. 2	North from Lamabagar
10) East No. 3	Not permitted to go to areas en route to Tibet north of Thanigaon from Namchebazar. Permit is only granted for areas en route from Namche Bazar via Thangboche towards the Everest zone
11) Dhankuta	Sankhuwa North (Thoom)
12) Ilam	Tamor Khola (Thoom)

エベレストの名称統一について

従来エベレストの名称につき、エベレスト、エヴェレストの両方を使用していたが、三月十一日のエベレスト組織委員会に於てエベレストに統一することを決定した。従って会報でも本号からエベレストを使用することにした。

高度についても八八四〇m、八八四八mの両方が使用されているが、本会では Royal Geographical Society で採用している八八四八を使用することに決定した。

尚エベレスト委員会の経過報告については次号で詳しく報告する予定である。（松田）

カトマンズ通信

東海支部長　石原国利

お変りなくお過しのことと存じます。カトマンズも四月に入ってから天候が回復し、日中は暑さを感ずるようになってまいりました。登山許可の方、一向に進展していません。しかし、今回の遠征隊の閉め出し問題は、ネパール国内でも大部、話題になり、特にソロクーンブ出身の代議士が国会で答弁を求め、それに対して総理が、「一時的な措置である」旨答えるなど、やや雪どけの気配を示しはじめました。国内旅行の旅行可能区域にしても禁止区域一覧表を旅行者に渡すなどして、一時伝えられたネパールが国を閉ざしたという印象を打消そうとしている様です。参考までに土地の新聞の英訳（省略）と旅行禁止区域一覧表（上段参照）同封致します。

私はもうしばらく様子を眺めて五月末までに帰国する予定です。会の皆様に宜しくお伝え下さい。

（松方会長宛、四月二十二日付）

台湾山岳協会のプロフィル

（台湾省山岳協会）余　初雄

△台湾山岳協会は、台湾省体育会の傘下に属する二十二の協会中、会員二五〇〇余人をもつ大きな会である。

△会報は隔月の発行で、毎日曜日数カ所の登山コースへ行ったのと、前期分の報告が主となっている。

△毎年春の植樹節は、国父・孫文先生の逝世を記念して、台北近郊の山に数千本の苗木が、市民の手で植えられる。

又秋に双十節を慶祝して行われる五十粁強歩大会は、市民に待たれる会の年中行事となった。

△会長周百錬氏は長崎医大出のドクター、去年まで台北市長をつとめ、現在省政府の委員で、毎週一度の定期会議に、台中へ往復されるお忙しい方だが、山の話のわかる我等のよきキャップだ。

△会の位置は台北市のほぼ中心、円公園の近くにあり、毎晩おそくまで、ヒマな連中が自由に集まり茶を飲んでいる。

会員の中にお茶の大貿易商がいるので、旨い茶の種類や来源にこと欠かない。初めて飲んだ者は、その夜はなかなか寝つかれないとこぼすが、その香りのよい後味が、いつまでも口の中に残っていて忘れられない。誰かがこのことを名ずけて阿片だといったが、本当に病みつきになってしまう。

ここでは途中から消えるのは自由だが、その時は挨拶をしないのがエティケットになっている。

△会の三階のホールで毎月の二十日に例会が行われ、先月分の山の報告、カラースライド、8ミリの映画などがあり、来月の登山予定などが検討される。

△二階のルームの壁に、台湾山岳の一覧表が色分けで出ている。赤は三千米級で一〇五座、緑は二千米級で一六五座、青は一千米級で二五〇座、この他に無名のピークは無数にある。三千米級だけをオールハントするとしてもこの調子では一生、いや七度生れ代って来なければなるまい。

△ルームの壁には、戦後外国から登山に来台したチームのペナントや楯が所狭しと飾られてある。日本山岳会のルームにもこれほどは集まっていまい。

△「遠征」という言葉は嫌いだ。文字の国だけにこちらには歓迎されない。日本から外国へ出る時軽く使われるが、この逆の場合を一

寸考えてみよう。

△会員の誰かが一週間以上の山旅に出かける時には、いつでも沢山の友達が駅に見送りに行く。これは戦後ずっと続いている。

▽戦後といえば、山へ行くのに継ぎだらけで、雑布一歩手前のボロ服をつけて行ってもおかしくなかった終戦直後が懐しい。

△常夏の島でスキーが出来るということは案外知られていない。毎年の旧正月の休み、合歓山へ数千人も押しかけるのだが、今年は雪が少なくて皆こぼしていた。来年はここに観光ホテルとスキーリフトをつける計画だと新聞は報じている。

△戦後、台湾の山で遭難死者を出していないのは喜ばしい現象だが、これは登山者が無理をしないということと、高岳に入る時はかなり面倒な入山手続きが必要だというのが原因である。

△山は静かだ、どのコースを登っても、絶対に登山者に出遇わないということは自慢にはならないだろうが、これが又、外国の登山者にはたまらない魅力でもある。

△又、台湾の山に毒蛇が多いと恐れられているが、私は今まで来台した山の友に、蛇を見つけたら一匹につき一本のビールをかけたが、負けたことがないのは有難い。

△八通関での燃料は、戦後二十年経った今でも、そこらに散らかっている昔の警察駐在所の桧の角材を勝手に燃やしても使いつくせないとは、一体どういうことであろう。

△ポーターの山胞が、荷が重い時に発する長く響く「ヨー・オ・ハイオェー」とか「ヤー・オーエオー」という独特のかけ声、そのヨーデルにも似た美しいこだまが、今でも耳に残っている。

台湾の登山について

最近、海外渡航の自由化に伴って、観光ビザにて渡台の上、入山を計画される登山者が多くなりましたが、この程在中華民国木村大使、外務省アジア局長、台湾山岳協会より次の如き文書が当会宛届きましたので充分御配慮の上、手落ちの無いように願います。

一、亜中合第一六七八号、昭和四十年五月十四日。

日本山岳会　御中

外務省アジア局長

登山隊に対する中華民国政府の入山許可について

本件に関し、在中華民国大使館から、本年四月以降中国側の取扱いが変更された旨別添公信写のとおり報告がありました。　後署

一、台第七六八号、昭和四十年四月二十七日

外務大臣殿

在中華民国　木村大使

登山隊の入山許可について

当国には毎年多数の日本からの登山隊が来台し、玉山等の中央山脈の山に登山しているが、これら登山隊は入国の際観光査証で入国するもの或いは入国査証によって入国するものまちまちであり、従来はいずれの場合にも入山許可が与えられていたところ、(当地は御承知のとおりこれらの山は管制山区となっており入山する場合は警察当局の許可を必要とする)本年四月以降入国査証によって入国した場合にのみ、入山許可が下りることになったので関係方面にしかるべく御通報賜わりたい。

なお、登山を目的として来台する場合は当地山岳会の招聘状を入手したのち、入国査証をとり、来台後該山岳会の証明をつけた入山許可申請書を提出するのが、正規の手続であるので念のため申し添える。

一、日本山岳会　御中

台湾山岳協会

総幹事　蔡　礼楽

前署、本会は我政府当局の指示に依り次の通り御通知申上げます。

四月一日より入山管制法規が一部変更され、今迄通り観光ビザにて甲種入山申請許可が不可能となりました。観光ビザは観光地区の入山(乙種)のみ許可する事になり、甲種は(登山を対象とする地域は殆んど含まれる)正式の招聘に依る入国でなければ入山は出来ません。就きましては将来休暇を利用しての我国の玉山、雪山登山が出来ない事になります。その様な隊の照会がありましたら暫く計画の中止を御催告願います。

本会は当局とも今後接衝に努力する積りでございますが、当分は見込がございませんから、どうか会員に前述の事項を御通達願い度く存じます。

では取急ぎ御通知と貴会の御発展をお祈り致します。　敬具

中華民国五十四年三月十六日

――×――×――

尚従来は本会においても数多くの登山隊を台湾省山岳協会の厚意に依り正式招聘の手続の上で送り出したが、登山については各登山隊にその都度、同協会員に同行願って居り、また同行しなければ入山を許可にもならないので大変迷惑を掛けている次第である。従って今後本会にて推薦する登山隊は同一時期に何隊もと云うわけにもいかないので、事前に充分同協会とも連絡の上、一シーズン、一隊位に制限することにしたい。

(折井)

△図書のお知らせ▽

○最近の受入れ山岳会誌

引越しの為などあって、大分整理が渋滞して居りましたが、最近次の山岳会誌を、整本の上、ルーム書架に編入しましたので、お知らせ致します。

No. Received	Title	Date Published
10528	Mitteilungen des Deutschen Alpenvereins	1962/4～1963/3
10529	De Berggids	1957～1960
10530	De Berggids	1961～1963
10531	MAZAMA	1958～1962
10532	Appalachia	1964
10533	Rivista Mensile	1961～1962
10534	Rivista Mensile	1962～1963

○蔵書交換について

次の山岳会誌の内、(A)に記載のものが、目下行方不明なので、係では困って居ります。

それに比べて、(B)に記載のものは、会の蔵書に二部以上ありますので、もし(A)を余分にお持ちの方で(B)の内にお持ちでないものがありましたら、交換して頂くわけにはいかないでしょうか。

(A)

The Alpine Journal No. 300, No. 302, No. 303, No. 305

The Himalayan Journal Vol. 22, 1960

The American Alpine Journal Issue 29 1955, Issue 35 1961

Rivista Mensile Vol. 83, 6 & 7

(B)

The Alpine Journal No. 287 1953

The Himalayan Journal Vol. 19, 1955-56

The Journal of the Mountaineering Club of South Africa 1958

The American Alpine Journal

Issue 24, 1950
Rivista Mensile Vol. 76, No. 9-10

尚、目下はルームの図書は整理の都合上貸出禁止になっていますが、欠本を補充するなど整理の完全を期して、出来るだけ早い機会に貸出し出来得る体勢に持込むべく、鋭意努力中ですので、しばらくお待ち願います。

図書紹介

東ネパール
—生態調査とヌンブールの登頂—

沼田　真編

一九六三年に千葉大学ヒマラヤ委員会が派遣した、ロールワリン・ヒマール学術調査隊の公式報告である。型式は横書の学会誌の形をとり、英文の要約がついている。英文のタイトルは'Ecological Study and Mountaineering of Mt. Numbur in Eastern Nepal, 1963, Edited by Prof. Dr. M. Numata, Himalayan Expedition of Chiba Univercity (1965) となっている。

この隊は、千葉大学山岳部OB会によるヌンブール登頂班に、学術班として、沼田教授と依田恭二氏が加わった隊であったが、学術調査隊の名前にはじない様に、登山班の隊員も、学術的テーマをもって参加しているが、この報告書には隊のムードと成果がよくあらわれている。

内容は第一部・登山と第二部・学術調査からなっている。登山の方は隊の行動報告を鈴木一元、ヌンブール登頂記と装備を松尾宏、食糧を小浜浩三、医薬品及び器材を嶋田晃一郎の各隊員が分担しており、一応型どおりの報告をしている。行動については山岳第五十九年にも出ているが、装備、食糧、医薬品及び器材の項は、リストもありスモール・エクスペディションの参考になるところが多い。

第二部の学術調査が何といってもこの報告書の中心となっている。依田恭二氏の東ネパールの森林植生の予備的調査、沼田真教授の東ネパールの竹と笹、東ネパールの雑草植生、と夫々専門の植生の分野に鋭いメスをいれている。短期間の間によくもこれだけのものを調べられるものだと驚くばかりである。内容が自然観察が多いので、素人のわれ〳〵にも興味をもって読めるのも有難い。私達が唯なんとなく通ってしまうキャラバンの途中にこれだけのものが見られることを知り、考えさせられるものがあった。鈴木一元氏の住居概況、小浜浩三氏の農器具と度量衡は、工学部出身というだけで必ずしも専門家ではない両人にとっては大変な労作と思える。沼田隊長というよい指導者の指導のたまものと思われるが、登山班員でも、一応これだけのものを発表できれば、学術調査隊の名に恥じることはない。嶋田晃一郎氏の「医学的諸問題」にも苦労のあとがうかがわれ参考になる点が多い。島田、真家両氏による「ヌンブールの気象」は立派なデータであるといえる。従来よりヒマラヤに於ける気象観測は、出発前にははりきって計画しても、実際に現地で観測し、帰国後も自からデータを整理して発表した者は非常に少ない。かく云う私も出来ずに終ったものの一人である。私の記憶では、五〇〇mbの高層天気図を入れてのデータの発表は、九年前のマナスル隊に次ぐものであると思う。筆者は謙遜して発表しておられるが、私はその意味でこの記録を非常に高く評価しているものの一人である。そして今後もこの種の記録は是非発表してもらいたいと思っている。

全般的にみて、この報告は非常に親切にできている。簡単な英文の抄録があり、図表等に英文が入っているのは、学会誌では当然のこととは云え大切な点であると思う。従来より日本の登山記録はその意味では大変不親切であった。日本隊の記録が世界の岳界から評価されるためには、こうした細かい心遣いが必要であると思う。

A5版、一六六頁、地図二枚、写真、図版多数、昭和40年3月、千葉大学ヒマラヤ委員会発行。非売品　（松田雄一）

会務報告

新年度第一回理事評議員会

四月二十六日・ルーム

△出席者　松方会長、渡辺副会長、理事・加藤、深田、辰沼、大塚、松田、村木、川上、田村、竹田、杉浦、川崎、評議員・日高、神谷、藤井、青木、村井、石原東京支部長（委任）田辺、宮下、飯野各理事、今西（寿）、津田、後藤、川喜田、末松、野口（秋）、小原、吉沢、望月、織内各評議員、監事松本

▽議事及び報告

(1)日本山岳協会新役員推薦の件、本会より選出する新役員を次の様に決定した。

副会長—松方三郎
専務理事（一名）加藤泰安
常務理事（三名）辰沼広吉、大塚博美、松田雄一
理事（七名）深田久弥（東京）中田勇吉（富山）高山忠四朗（信濃）三井松男（山梨）水野祥太郎（関西）山本朋三郎（静岡）斎藤平七（越後）
監事（一名）藤井運平

(2)本年度方針検討の件

本年度理事会としては次の六項目を懸案事項として考えたい。

①会員に対するサービス
②山岳協会活動に対し積極的に対処する
③学生部の育成・指導を強化する
④会の運営資金たる会費の徴収を徹底する
⑤エベレスト登山の実行
⑥六十周年記念行事の遂行

これに対し出席者より種々と具体的な提案がなされた。各担当理事は、これらの意見を参考にして五月の理事会迄にその方針を立てることにする。

(3)理事事務分担の件

加藤（総務・企画・協会）、深田（会員・図書・山岳編集・協会）、辰沼（遭難対策・協会）、村木（指導）、大塚（海外登山・装備・協会）松田（庶務・海外連絡・協会）、飯野（経理・山小屋管理）、皆川（山日記）、川上（指導）、田村（研究調査・医療）、武藤（研究調査・医療）、住吉（関西・指導）、田辺（指導・六十周年記念事業）、竹田（指導・装備）、杉浦（会員・自然保護）、川崎（集会・庶務）、宮下（会報）、渡辺（支部）。

なお、常務理事は、加藤、深田、辰沼・村木・大塚・松田、飯野以上七名に決定する。

(4)常任評議員追選の件

折井評議員を、出席評議員万場一致常任評議員に推薦した。

(5)委員会設置の件

各担当理事に於て下部組織とし

て委員会を設置したい場合には次期理事会迄に具体案をつくることにする

(6)其の他報告事項

①木暮翁碑前懇親会—五月二十三日、金山平に於て開催(神谷)

②植樹祭の件

本会代表としての出席者は地元の織田山陰支部長に一任することにする。　以上

五月定例理事・評議員会

十三日・ルーム

▽出席者、松方会長、理事—加藤、深田、辰沼、大塚、松田、飯野、田村、田辺、竹田、宮下、杉浦、川崎、皆川、評議員—神谷、日高、村井、藤島(敏)、吉沢、望月、中田支部長、野口監事、東京支部芳野委員

(委任)三田、渡辺副会長、村木、住吉、武藤各理事、青木、織内、石原評議員

▽議事及び報告

(1)本年度の各担当理事の方針並びに運営方法(詳細二—五頁参照)

①海外連絡……松田理事

②会員係(ルーム整備、会員名簿の発行)……杉浦理事

③図　書……深田理事

④支部……渡辺副会長の意見を松田が説明

⑤会報編集……宮下理事

⑥指導係……田辺理事

⑦関西・指導……住吉理事の意見を松田が説明

なお松方会長から関西在住理事も、二ケ月に一回位出席できる様旅費を予算に組んでもらいたいとの提案があり、本件可決した。

⑧海外登山……大塚理事

⑨山岳編集……望月評議員

⑩山日記編集……皆川理事

⑪自然保護……杉浦・村井

⑫研究調査……田村理事

⑬遭難対策……辰沼理事

⑭集　会……川崎理事

⑮経　理……飯野理事

⑯神河内山荘運営…飯野理事

⑰庶　務……松田理事

(2)理事担当事務追加の件

松田の提案で、装備担当理事をおくことを決定。会の装備品の管理を行うことになった。担当理事は大塚、竹田の両理事が当り、ヒマルチュリの際の装備の処分方法についてはエベレスト委員会に依頼し、記念品として永久保存する物、展示会用として残すもの、会の講習会等で使用するもの、エベレスト登山に使用可能のものを除き他のガラクタ類、消耗品はしかるべき方法によって処分することを決定した。

(3)エベレスト計画の状況

板垣駐印大使からの書信によれば、「ニューデリーに於いては、状況把握は困難であり、本会より日高前会長がカトマンズを訪問する件については賛成である。交渉の時期についてはネパール国王がアルジェで開かれる第二回AA会議に出席される模様なのでその前が宜しい」との報告があったが、五月十五日に同大使が帰国されるので、ゆっくり相談して決めたい。　(松方)

(4)日本・インド婦人合同登山の件

この度インド国防省のサリン氏から三田氏にあて返事があり、目的地を Himachal Pradesh 州の Chamba 地区にしては如何かということであるが、本件に関しては杉浦理事を中心に東京支部の婦人部で検討中である。　(松方)

(5)六十周年記念事業について

昨年十二月に決まった七名の委員に、理事会から、田辺、加藤理事が加わって早急に具体案を立て実行することにする。尚深田理事よりこの委員会の委員長は松方会長にすべきであるとの提案があり本件可決した。

(6)其の他

①五月十五日に行われる慈恵医大杉本良一氏の追悼会には会より加藤、辰沼が出席する。

②天竜川、時又港跡にウエストン師を偲ぶ時又碑が完成し、五月九日除幕式が行はれた。(六頁参照)　(松方)

③上高地のウエストン像の前に立てる木札の説明文を書いて信濃支部長宛送った(八頁参照)　(松方)

④シャモニーの国際登山集会に、本会から派遣する二名の代表は目下エベレスト委員会で選衡中である。　(松田)

(註)五月十四日開催のエベレスト委員会にて、東京支部委員の倉知敬、君島久登両名と決定した。

⑤大分ヒマラヤ委員会のヒンズークシ遠征問題について

大分岳連の声明文とこれに対する反論声明があり、本会に対し遠征隊長名で後援願いが出されているが、本会としては遠征隊の後援は原則として行っていないので、実情調査旁々海外登山担当理事より返事することにする。本会としては、大分支部の後援している行事でもあるので協力はするつもりであるが、いずれにしても県内での内紛が解決することが前提条件である。　以上

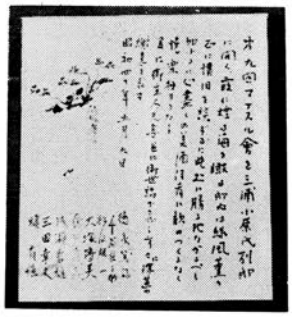
《山日記》予定内容

山に登る人々のために
山登り読本
山の装備
山の食料
山の気象
山の医学
登山指導者の責任
自然保護について
登山用語
世界の山
難読地名
山の歌
日本の山
日本の峠
山小屋一覧
登山行程表
地図図幅一覧

第九回マナスル会

例年五月九日の登頂日を記念して第三次登山隊員の間で行ってきたマナスル会も、今年で第九回を迎えた。今年は小原氏の招きで三浦半島の景勝の地、下浦海岸にある小原別邸で行ったが、当時を回想して大変楽しい会合であった。特に本年は槙隊長が叙勲された直後でもありこのお祝もかねて行った。来年はマナスル登頂十周年を迎えるので盛大に行いたいと考えている。尚今回は、小原夫人、JAC婦人部の杉浦、山口嬢に準備の面で大変お世話になりました。紙面をかりて御礼申上げます。

(出席者)槙、三田、成瀬、小原、辰沼、千谷、依田、大塚、徳永、松田　(松田)



「マナスル」頒布のお知らせ

本会編集、毎日新聞社刊のマナスル「一九五四—五六」は、会報でも屢々報じた通り、海外に多大の反響をよんだ報告書であるが、同時にネパール・ヒマラヤを目指す

隊にとっては大変参考になることが多く好評であった。然し現在絶版となっており入手は困難である。

本会では当時保存用として購入しておいたものを、若干在庫しているので希望者は、ルームまでお申出下さい。会員に限り定価一五〇〇円のところ三・三割引の千円にてお頒ち致します。（松田）

近藤、槙名誉会員の叙勲

既に御存知のことと存じますが、政府は第二回生存者叙勲を決定、四月二十九日に発表しましたが、この中に本会会員から近藤、槙両名誉会員が左記の通り栄ある叙勲を受けられましたので御報告致します。

○勲三等旭日中綬章　槙　有恒
○勲四等瑞宝章　近藤茂吉

原稿のお願い

JACの会員は山が好きだから会員になられた人が多いと思う。だがヒマラヤやその他の海外の山には余り関心のない人もいよう。

そうした意味でわれわれは地方の方々からの真面目な愉快な山行についての原稿を沢山頂きたい。写真があれば一層楽しい。日本の山ほど変化に富んだ美しい山々は世界のどこにもないはずである。

人が歩いたあとでも別の人が行けば又感興も変わる。皆さんの歩いたところ、そしてどんな小さなことでもよろしい、研究や調査をされたことも是非々々お送り願いたい。会員は皆それを待っているのです。原稿用紙でなくとも、字がわかれば結構です。遠慮なく左記へお送り下さい。原則として届いた月の翌月号には活字にしてお返えしします。

東京都北区滝野川町三ノ五
吉沢一郎方
日本山岳会会報編集委員会
御中

会費未納の方へ

昭和四十年度の会費が未納になっている方は、この**七月末**までにお納め下さい。会費は会を動かす原動力です。実際一寸面倒なものではありますが、ご協力下さるようお願いいたします。

編集後記

この号からいよいよ下記顔振れで会報を編集することになった。古沢さんには大部長い間お世話になりお礼の言葉もない。JACというところはどんなに忙しい人間でも、タダでこき使う仕組みになっているが、これも皆、好きな道のことだから文句もいわずにやっているのである。

私は事務所が虎ノ門にあった頃に一度会報の編集をやったことがある。従って今回は二度目のお務めとなる。あの頃からみると人も世間も随分変ったものである。

会報は会員のためのものだが、月刊にすると同時に、近い将来は実費で同好者に買って貰う計画でもあるから、内容も従ってそれに添うものにしていきたいと思う。

私はひとの本のアラ探しで悪名が高いようだが、今度は校正洩れ一字毎に一定の罰金をとるといわれた。自業自得というものか。まあそんなことのないよう皆で一所懸命やるつもりである。

古沢さんは長い間たった一人で苦労されてきたが、今度は私は別として、優秀なスタッフが沢山そろったので、一層立派なものを作らなければならない。舟が山に登るようでは申訳けないわけだ。兎に角、会員の中には相当うるさいご人が沢山いるので骨が折れる。

因みに今回から編集委員というのが決り、それぞれ仕事を分担していくことになった。左記の通りである。

会報編集委員（ABC順）

古沢　肇
（常任）倉知　敬
（常任）松田雄一
（常任）宮下秀樹
（常任）中島　寛
織内信彦
（常任）坂本矩祥
渡辺公平
山崎安治
（常任）吉沢一郎

今回は色々の事情で、出来そこないの官報みたいな味のない編集になってしまった。二、三号は同じ調子でいくかも知れないが、そのうちに辰沼画伯その他の人々の美しいカットで、少しは余裕を出していくつもりである。

尚、休日以外昼間会報の御用での連絡は左記へ願います。

東京都中央区日本橋小伝馬町三ノ二　日本団体生命保険
電話（671）1301
（吉沢一郎）

昭和四十年六月二十五日発行
東京都渋谷区神宮前三ノ三一　外苑コーポ内
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　吉沢一郎
電話（402）六、五〇一～五
振替口座東京四八二九番
頒価五十円
東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所　株式会社　技報堂

A List of High Mountains in the Hindu Kush Range

—arranged by Ichiro Yoshizawa—

Area	Names of the Mountains	Alt.	Dates of the Ist Ascents	Nat.	Leaders
E	Tirich Mir	7700 m	1950- 7-22	Nor	Arne Naess
E	Tirich Mir East	7692	1964- 7-25	Nor	Arne Naess
E	Noshaq (Doshaq)	7492	1960- 8-17	J	Y. Sakado
E	Istor-o-Nal	7389	1955- 6- 8	USA	J.E. Murphy, Jr.
E	Saraghrar	7349	1959- 8-24	It	Fosco Maraini
E	Noshaq East	7281 (7480)	1963- 8-21	Öst	G. Gruber, H. Pilz
E	Noshaq West	7200	1963- 8-21	Öst	G. Gruber, H. Pilz
E	Kishmi Khan	7170	1963- 7-28	Öst	Sepp Kutschera
E	Udrem Zom (Shachaur 2)	7131	1964- 8-19	Öst	Gerald Gruber
E	Koh-i-Nadir Shah	7125	1962- 8-27	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
E	Shachaur I	7116	1964- 8-17	Öst	G. Gruber
E	Langar I	7060	1964- 7- 9	D	Dietrich von Dobeneck
E	×Tirich Mir North	7056			
E	Urgend (Sirt-e-Urgend-e-Bara)	7038	1963- 9- 4	Sch	Max Eiselin
E	×Achez Czioch	7020			
E	Languta-e-Barf	7017 (6995)	1963- 9-27	Pol	Andrzej Wilczkowski
E	Koh-i-Tez	7015	1962- 8-28	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
E	×Noshaq South-East P.	6999			
E	Koh-i-Shayoz	6920	1963- 9-20	Öst	Markus Schmuck
E	×Lunkho I	6890			
H.R.	×Koyo Zom	6883			
E	×Lunkho 2	6872			
E	Koh-i-Shoghordok	6855	1963- 9-20	Öst	Markus Schmuck
E	Langar South-East P.	6850	1964- 7- 8	D	D. von Dobeheck
E	Gumbaz-e-Safed	6797	1963- 8-30	Öst	G. Gruber, H. Pilz
E	Langar North	6750	1964- 7- 5	D	D. von Dobeneck
E	South Glacier Peak	6700	1939- ?	Br	Miles-Smeaton
M	Koh-i-Bandakâ(kor)	6660 (6500)	1960- 9-22	D	W. von Hansemann
E	Koh-i-Mandaras	6631	1962- 9- 4	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
E	M 2	6580	1963- 9-25	Pol	A. Wilczkowski
H.R.	Buni Zom	6551	1957- ?	NZ	?
E	Baba Tangi	6513	1963- 8- ?	It	Carlo Alberto
E	×Nameless (Nicolas Ra.)	6504			
E	Koh-i-Warg	6500	1963- 7- ?	Öst	Sepp Kutschera
E	×Wakhjir Pass South P.	6500			
E	Asp-e-Safed	6449	1960- 9- 4	Pol	B. Chwaszinski
E	Shah (Sirt-e-Urgend-e-Payan)	6445	1963- 8-26	Sch	Max Eiselin
E	Kuh-e-Awar	6440	1963-10- 2	Pol	A. Wilczkowski
M	Koh-i-Bandakâ North	6400	1963- 7-17	D	Th. Trübswetter
H.R.	×Shakhandok	6320			
E	Koh-i-Spurditsch	6300	1963- 7- ?	Öst	Sepp Kutschera
E	M 4 a	6300	1962- 8- ?	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
M	Koh-i-Chrebek	6250	1961- 8-17	D	J. Ruf
M	Koh-i-Mondi	6248	1962- 7-26	D	Sepp Ziegler
M	Koh-i-Bandakâ Sachi	6200	1963- 7-17	D	Th. Trübswetter
E	Langar Vorgipfel	6170	1964- 7- ?	D	D. von Dobeneck
M	Shakh-i-Kabud	6150	1961- 9- 6	D	D. von Dobeneck
E	M 3	6100	1962- 8- ?	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
E	×Ishpandar Sor	6088			
M	Mir Samir	6060	1959- 6-21	D	H. Biller
M	Koh-i-Marchek	6060	1961- 9- 1	D	D. von Dobeneck
M	Koh-i-Jumi	6020	1962- 7-26	D	Sepp Ziegler
E	M 5	6000	1962- 8- ?	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer

Explanation of the abbreviated letters……Alt(Altitude), Br(British), D(Germany), E(East), H.R.(Hindu Raj Range), It(Italy), J(Japan), M(Middle), Nat(Nationalities), Nor(Norway), NZ(New Zealand), Öst (Austria), Pol(Poland), Sch(Swiss). ×……The unclimbed peaks.

▶この表の元のものは、吾妻山での研究会の時に参会者にわけたものだが、その後皆さんの助言と私の調査で加除訂正した。まだ不充分なところがあると思うが、いずれ確↗↙っかりした資料によって完璧なものに近づけたい。ヒンヅー・クシュは今のところ入り悪くなっているが、研究だけはしておいてもよいと思う。 (吉沢一郎)